

こしえるびと

つむぐストーリー vol.111

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

高品質イチゴを生産し反収を上げたい

千厩町千厩 皆上広志さん

退職を決意し農業の道へ

木々の隙間から暖かな光が降り注ぐハウスの中。皆上広志さんは、イチゴの生育を一粒一粒確かめながら管理作業を進める。

木材加工会社に勤めながら就農を考えていた広志さんは、ワンストップ相談窓口に通い、品目や設備などの相談を重ねた。父の輝雄さんはトマトを栽培していたが、山中の狭い土地でどれだけ収益を上げられるかを検討し、反収の高さからイチゴを選択。退職の前年、トマトを栽培していたハウスを利用してイチゴ苗を定植する計画を立てた。ところが、2020年の大雪でハウスが倒壊してしまふ。このピンチをチャンスと捉え、事業を拡大することで対象となった助成事業を活用。ハウスを再建し、イチゴ苗の定植も実現させた。翌21年、会社を早期退職。広志

さんのイチゴ栽培がスタートした。

反収を上げるために 試行錯誤

広志さんが目指しているのは、品質の良いイチゴを生産し、決められた栽培面積の中で販売金額を上げていくこと。現在は品種「やよいひめ」に絞って栽培しているが、次は果形の良い「さちのか」を導入して秀品率を上げ、クリスマスシーズンなど相場が上がる時期に出荷することで1個当たりの単価を上げたいと考えている。前年の反省を生かしながら、「今度はこうしてみよう」と日々、試行錯誤を繰り返す。毎日の収穫量に応じて、果実に日が当たるよう摘葉したり、着花が良くなるよう摘果したりする。段取りなどを自分で工夫し、収入につなげられるのがやりがい。イチゴの出荷最盛期は冬期

間だが、夏場にも育苗作業があり、年中忙しさが続く。「休みがないが、満足している」と広志さんは話す。

イチゴを栽培する仲間を増やしたい

高齢化のためJAいちご生産部会の仲間も減少している。資材や燃料費の価格高騰により経費が上がっているのは悩ましいが、秀品率、大玉率の高い品種が続々と登場しているのは期待が持てる。広志さんは「イチゴ栽培は簡単ではないが面白い」と、イチゴ生産者が増えてほしいと願っている。

「動けるうちはイチゴ栽培を続けていきたい」と話す広志さん。当初は規模拡大やベンチ栽培などの設備投資も考えたが、現在は一人でも管理が可能な現状を維持することに決めた。経験を重ねながら、広志さんは歩み続ける。



PROFILE

皆上 広志さん (60)
Hiroshi Minakami
千厩町千厩

1964年千厩町千厩生まれ。地元企業を2021年に早期退職し就農。イチゴ10%。妻、父と3人暮らし。